

7～8月の盛夏の頃、南河内の山々の山頂付近では、「キアゲハ」や「ツマグロヒョウモン」などのチョウチョがなわばり争いをしていました。

そして草原を見渡してみると、ところどころにオレンジ色の大きな花、「コオニユリ」が咲き誇っていました。

「コオニユリ」の花期は7～8月で、山地の草原に生育する高さ1～1.5mほどの多年草です。人里近くに生える「オニユリ」に比べて、草丈や花の大きさが全体的にほっそりとして小さいことが「コオニユリ」の名前の由来でしょう。

また、「コオニユリ」はよく結実しますが、一方の「オニユリ」は種子を見ることがなく、葉の付け根に暗紫色の「ムカゴ」(植物の栄養繁殖器官のひとつで、離脱後に新たな植物体となる)を作ります。

一説によれば、「コオニユリ」は実生から6～8年くらい経たないと開花せず、「オニユリ」はムカゴから3年くらいで開花する、と言われています。

さて、盛夏の頃、キアゲハが吸蜜に訪れていた「コオニユリ」は、冬を間近に控えたこの時期、無事に結実しているのでしょうか？

写真 : 草原に咲く「コオニユリ」 (キアゲハが訪花しています) 【 8月下旬撮影】

写真 : ススキ草原の中の「コオニユリ」の実 【11月下旬撮影】

写真 : ネザサ草原の中の「コオニユリ」の実 【 " 】

写真 : 小さなポテトチップスのような「コオニユリ」の実 【 " 】

写真 ・ : 風に吹かれて飛び散っていく「コオニユリ」の実... 【 " 】











